

社会主義中国の宗教政策

——抄訳『中国社会主義時期の宗教問題』その8

大澤 邦 由

本稿は羅竹風主編『中国社会主義時期の宗教問題』（上海社会科学院出版社、一九八七年）第七章「終わりに（結束語）」と「後記」の翻訳である。

本稿をもって『中国社会主義時期の宗教問題』のすべての翻訳が完了することとなる。本書の各章各節の訳稿が本稿のいずれに収録されているかについては、「社会主義中国の宗教政策——抄訳『中国社会主義時期の宗教問題』その6」（駒澤大学仏教学部研究紀要）八一、二〇二三年三月）および「同 その7」（『駒澤大学仏教学部論集』五四、二〇二三年一〇月）を参照されたい。

第七章「終わりに」では、本書全体の総括や今後の宗教研究の展望が記される。

その中で紙幅の大半が割かれるのは、宗教阿片論に関することである。マルクスによる「宗教は民衆の阿片である」という著名な言葉は、一般的にはマルクス主義の宗教に対する基本的姿勢を示すと理解されがちであるが、本章ではこの言葉について再度の検討を行い、単純にこの言葉を解釈して、社会における宗教の負の側面ばかりを強調してしまうことに対して強い警鐘を発している。

一般的にマルクスの宗教阿片論は次のように理解されることが多いであろう。つまり、宗教とは民衆を麻痺させて被抑圧の境遇に甘んじさせるために、統治者が統治のための道具として用いてきたものであり、革命を阻害する害悪である。マルクス主義とは対立するものである。本書はこのような比較的単純な解釈に対して、必ずしもこのように断言できるわけではないことを指摘し、次のような観点から説明する。まず、マルクスが宗教阿片論を述べた「ヘーゲル法哲学批判序説」の文脈において、彼がその比喩を述べたことの歴史的な経緯を説明し、これがマルクスの独創ではなく、

フオイエルバッハなど、彼に先行するドイツの学者間にも見られる譬えであることを述べ、さらに普遍的な意味で宗教は阿片であると述べたものではなく、そこには歴史的な限定が伴っていると主張する。さらに、レーニンがマルクスの宗教阿片論を引用して、それを格言でありマルクス主義におけるかなめ石であるとしたことについても、そこには歴史的限定が伴っていると解釈する。次に、宗教が阿片という消極的作用のみならず、歴史的にも様々な肯定的作用を及ぼしたことを論じ、最後に階級社会から社会主義に変革した時期においては、統治階級と被抑圧階級という関係が消失した以上、阿片をもって宗教を説明することはなおのこと不適切であるなどと述べる。

本書がこのように宗教阿片論に対して多少の譲歩はあるにせよ反駁し、それを強調して説明する背景には、宗教が徹底的に破壊された文化大革命が終わりをつげ、一九七八年、党の第一期三中全会以降、鄧小平の指導のもと、改革开放政策が開始されてもなお、宗教阿片論が根強く、宗教信仰の自由政策を執行する上での妨げとなっていたということが挙げられよう。鄧小平が掲げた「实事求是」を宗教研究に当てはめて中国の宗教の実地調査を行って記録することが本書の目的であり、特徴の一つであるが、それと関連して宗教信仰の自由政策を推進するため、宗教阿片論を牽制し、実際の事例を探求しながら社会主義と宗教は相互協調が可能であることを明示することもまた、本書編纂の主張の一つであったということが出来る。

本書は、「後記」によって明らかなように、上海社会科学院宗教研究所や上海市宗教学会を中心とした一七名ほどの研究者が調査執筆に携わった編著であって、第七章「終わりに」が誰によって書かれたかは明記されていない。しかし、第七章の第一段落において「私自身の見解（『自己的看法』）を簡単に述べてみたい」と記されることから、第七章「終わりに」は主編である羅竹風氏自らの手によって著されたものであり、本章の内容は彼の主張が反映したものであると推測することができる。「自己的看法」とは、すなわちその内容には個人的見解が含まれるものであり、その文章の責任を持つ意と解されるためである。

そこで、羅竹風氏の経歴などについてあらためてまとめておきたい。

羅竹風（一九一一—一九六）は、山東省平度の人で、言語学者、宗教学者、出版家、雑文家などの面を持つ。一九三五年に北京大学を卒業後、一九三八年に中国共産党入党。山東大学教授、華東および上海市宗教事務処処長、上海市出版局局长、上海市哲学社会科学学会联合会主席、上海市第二期、第三期政治協商会議常務委員、上海市第七期、第八期人民代表大会

常務委員、上海社会科学院宗教研究所名誉所長、山東大学、華東師範大学、上海師範大学の客員教授などを歴任。編著としては、本書『中国社会主义时期的宗教問題』のほかには、『漢語大詞典』（漢語大詞典出版社、一九八六—一九九一年）主編、『辞海』（上海辞書出版社、一九七九年）副主編、『中国大百科全書・宗教卷』（中国大百科全書出版社、一九八八年）主編など、世界的に著名な大型辞典類の編纂に携わり、また、『宗教通史簡編』（華東師範大学出版社、一九九〇年）、『宗教学概論』（華東師範大学出版社、一九九一年）など宗教学分野の著作の主編にも携わった。他にも『上海雜物選』等、多彩な編著がある。その経歴からも知られる通り、羅竹風は研究者であるだけでなく、共産党員として行政にも携わり、中華人民共和国成立後間もない時期の共産党の宗教行政にも携わって、一定の影響を与えた。むしろ、その立場、少なくともその起点は、共産党員として宗教行政に携わったところにあると言って良いだろう。羅竹風の上海社会科学院の後輩で、本書の編纂にも携わった陳耀庭（元上海社会科学院宗教研究所所長）「開拓的精神 实在的構建——試評羅竹風同志的宗教学研究」、『學術月刊』一九九七年第六期）や業露華（元上海社会科学院宗教研究所所長）「羅竹風同志与宗教学研究」、『仏教文化』一九九八年第一期）は羅竹風の没後、その功績を称えて宗教方面の経歴をまとめており、これらを頼りにして羅竹風が本書を主編するに至った経緯について、氏の宗教とのかかわりともに見てみたい。

羅竹風が宗教に接するようになった機縁は五〇年代初めの時である。彼は中華人民共和国成立の後、青島から上海に異動となり、しばらくして華東軍政委員会や上海宗教事務処で働くようになった。この時の上海は、仏教や道教が全国に影響を持っていただけでなく、プロテスタントの事務機構の多くやカトリックの各宣教組織の拠点がこの地に置かれたことから、国際的にも大きな影響を及ぼす場所であった。羅竹風は国務院総理であった周恩来（一八九八—一九七九）の直接的指導のもと、党の宗教政策を執行したという。たとえば、宗教を隠れ蓑とした帝国主義分子との民衆闘争においては、力強く民衆の愛国感情を支持し、また、プロテスタントの三自愛国運動への支持、及びそれに従わないものへの説得を細やかに行った。さらに杭州靈隱寺の修復や上海玉仏寺の保護や整備にも携わり、宗教界の人々とも深く交流した。さらに、周恩来の指示のもと、聖書やコーラン、仏典を読み、各宗教教義への理解を向上させた。その後、上海哲学社会科学学会聯合会の設立に関わって宗教行政からは離れるが、常に宗教への関心や宗教界の人々との交流は生涯続いたという。

その後、一九六六年に巻き起こった文化大革命の混乱の期間には、ほかの多くの幹部同様に迫害を受けたが、四人組

失脚の後に復職した。一九七九年、全国宗教学研究規画会議が昆明において開かれた際、彼は「宗教研究に関する若干の問題（関于宗教研究的若干問題）」という報告を発表した。この中で彼は、宗教信仰の自由政策を回復し実施するのは、取り繕いや恩恵ではなく、外国人に見せるためでもなく、まさに広大な宗教徒の宗教生活の要請に応えるものであり、必ずや真剣に、断固として、大胆に政策を施行していかなければならない、と述べた。そして、この会議において、成立して間もない中国宗教学会副会長に就任した。一九八〇年、上海社会科学院宗教学研究所と上海宗教学会の設立を提案し、上海社会科学院宗教学研究所名誉所長と上海宗教学会会長に就任した。これらにおいて、現代中国宗教研究について目覚ましい成果を上げたが、その成果の一つが本書であった。

以上が本書成立に至るまでの羅竹風と宗教とをめぐる因縁である。周恩来との関係が記録され、周恩来の指示によって宗教典籍を熟読し、宗教についての知識を得ていったということは注目に値するであろう。

羅竹風の宗教に対する姿勢を示すとともに、その人柄をよく表すものとして、陳耀庭が次のように述べていることにも注目したい。「羅竹風同志は中国共産党の優秀党员であり、徹底した唯物主義者であり、彼は断固としてマルクス・レーニン主義を信仰しており、決して宗教を信仰しなかった」が、「羅さんは周恩来総理の指導のもと、当時、カトリックとプロテスタントの中で大規模に展開していた反帝愛国運動に直接参加し、周恩来総理の関心のもと、杭州靈隱寺の修復事業と上海玉仏寺の恢復開放事業を指揮した。一部の宗教界の長老たちが羅さんに会った時に、つねに親愛をこめて「老局長」と呼んでいるのは、このことがきっかけである。」（陳耀庭上掲論文、三頁）羅竹風は共産党员として信仰とは一定の距離を取りつつも、その親しみやすい人柄によって宗教界の人々と親しく交流を行っていたことがこのエピソードから知られる。

なお、以下の訳文は前稿同様、永井政之先生にご校閲いただいたものであり、ここに謝意を捧げたい。

第七章 終わりに

本書は中国社会主義時期の宗教問題を研究した一つの試みである。我々は検討の過程の中で、マルクス主義の基本原則を学習、活用しつつ、中国社会の歴史や実際の現状と結合させながら宗教問題に対して開拓的な思考を行うことが、

とても重要であることを深く実感した。近年来、我が国の学術界はマルクス等、革命先駆者による宗教問題についていくつかの論述について様々な理解の意見が提起され、論争の局面が現れたが、これは党の第一期三中全会の精神の躍動的な反映である。「百花齊しく放ちき、百家争鳴す」という春風が、長年「タブー」と見なされてきた宗教研究の領域にも吹き込んだことは、とても喜ばしい新たな景観であり、必ずや宗教理論研究の繁栄をもたらすであろう。ここで我々は「宗教こそは民衆の阿片である」(「ヘーゲル法哲学批判序説」『マルクス・エンゲルス全集』第一卷、大月書店、一九五九年、四一五頁、および「ヘーゲル法哲学批判序説」『マルクス・コレクションI』筑摩書房、二〇〇五年、一五八頁。本訳文は後者に依った)という問題をどのように理解するかについて、私自身の見解を簡単に述べてみたい。

一、「阿片」とは宗教が階級社会の中の一定条件のもとで引き起こす消極的な作用が形象化した比喻である。マルクスが「宗教は民衆の阿片である」と提起する前の数十年間において、ドイツにおいてのみ、少なからぬ学者たちがこのような形象の比喻を用いて宗教の麻醉的作用を描写していた。その中の一人は直接「阿片」の語を用いている。例えばフオイエルバッハ、ハイネ、ブルーノ・パウアーやモーゼス・ヘスなどである。このことから、宗教を「阿片」に例えることは、マルクスが先人の手法を踏襲したものであることが知られる。

マルクスはプロレタリア革命という側面から、宗教問題について緻密で独創的、かつ本質的な一連の見解を発表した。しかるに、マルクスの宗教理論を「宗教は民衆の阿片である」という一言に帰結してしまうことはできるだろうか。否！マルクス自身もまたこのように結論づけたことはない。彼が提起したのは、階級社会において、「この国家、この社会的結びつきが世界についての倒錯した意識である宗教を生み出しているのだ。なぜなら、この国家と社会こそは倒錯した世界であるからだ。」「天上の批判」を「地上の批判」に変えなければならず、「神学の批判」を「政治の批判」に変えなければならず、(これらの語はすべて「宗教は民衆の阿片である」と同一の著作である「ヘーゲル法哲学批判序説」『マルクス・エンゲルス全集』第一卷、大月書店、一九五九年、四一五―四一六頁、および「ヘーゲル法哲学批判序説」『マルクス・コレクションI』筑摩書房、二〇〇五年、一五八頁)からの引用である)及び、「彼らがその世俗的な限界を超えるならばすぐに、宗教的偏狭性も廃棄することになる」(「ユダヤ人問題に寄せて」『マルクス・エンゲルス全集』第一卷、大月書店、一九五九年、三九〇頁、および「ユダヤ人問題によせて」『マルクス・コレクションI』筑摩書房、二〇〇五年、一九二頁)ということである。これらの有名な論断は「阿片」によって概括しうるものではない。

たとえ、「宗教は民衆の阿片である」というこの句について見てみたとしても、その段落の全文は、

宗教という悲惨は、一面では現実の悲惨の表現でもあり、同時にもう一面においては、現実の悲惨にたいする抗議でもあるのだ。宗教とは、追いつめられた生き物の溜め息であり、心なき世界における心情、精神なき状態の精神なのである。宗教こそは民衆の阿片である。」（「ヘーゲル法哲学批判序説」『マルクス・エンゲルス全集』第一巻、大月書店、一九五九年、四一五頁、および「ヘーゲル法哲学批判序説」『マルクス・コレクシヨンI』、筑摩書房、二〇〇五年、一五八頁。本訳文は後者に依った）

となっており、この論述は明らかに階級社会における宗教の状況に焦点を当てて述べたものである。

後には、レーニンも「宗教にたいする労働者党の態度について」においてこの句を引用して、

このマルクスの格言は、宗教の問題におけるマルクス主義の世界観全体のかなめ石である。マルクス主義は、現代のすべての宗教と教会、ありとあらゆる宗教団体は、労働者階級の搾取を擁護し、彼らを麻酔させる役をする、ブルジョア反動の機関であると、つねに考えている。（マルクス・レーニン主義研究所訳『レーニン全集』第一五巻、大月書店、一九五六年、三九三頁）

と述べた。現在、一部の人はレーニンのこの文章を引用するとき、しばしば前半の一文のみを引用して後半の一文を省略し、「かなめ石」であるからには、いかなる時にも絶対に揺るがしえないものだと考え。しかし実際にはレーニンの後半の一文こそは、まさに前半の一文の適切な注釈なのではないだろうか。これが指しているのは当時の「現代」であり、宗教が「ブルジョア反動派」に利用されていた時代である。我々が考えるに、マルクスやレーニンの宗教が「阿片」だという論述は、まず当時のヨーロッパ（宗教と反動統治が非常に密接に結合していたドイツとロシア）の状況に着目し、宗教がプロレタリア革命の中で起こす消極的な作用に着目して提起されたものである。

また、彼らが説く「阿片」とは相互に関係する二つの意味を有する。

一つには、宗教は階級社会の「現実の悲惨の表現」であり、「追いつめられた生き物の溜め息」であって、労働民衆は階級的抑圧や搾取によって作り出される苦難から逃れられない時に宗教の中からまぼろしの精神的慰めを探し求めたのであり、人々が酒を飲んで憂さを晴らすのと同じように、自己鎮痛や麻酔の役割を果たす。

二つには、統治階級が宗教を利用して人民を麻痺させ、彼らを搾取や抑圧される境遇に服従、我慢させ、希望を天国

の恩恵に託させるというもので、それはあたかも盜賊が酒や肴を使つて人を酔わせて、その財物を盗むようなものである。明らかに、これら二つの含意の「阿片」とは搾取階級が反動統治を維持し、革命を阻害することに役立つ。したがつて、無産階級が革命を起して旧社会を覆すときには、必ずや宗教のこのような「阿片」の作用を暴き出して、労働者が現実の幸福を獲得することや、社会主義や共産主義の理想を実現するための闘争に目覚めさせ、鼓舞しなければならぬ。

二、歴史上の宗教の作用は時代や社会条件の違いによつて異なるものであり、一律に「阿片」によつて概括することはできない。

前文ですでに述べたように、歴史上の特定の時期には、被抑圧階級も宗教を反抗運動の精神的武器や団結の紐帯として利用してきた。長きにわたる階級社会の中で、宗教は革命に消極的作用を及ぼしたものの代表である。しかし、一定の条件においては、被抑圧階級が宗教を反抗の思想的な武器としたこともまた、無視できない歴史的事実である。エンゲルスは、

中世は、神学以外のイデオロギーのすべての形態——哲学、政治学、法学——を神学に併合して、これを神学の部門としていた。そのために、中世では、どの社会的運動も政治的運動も神学的形態をとるほかはなかった。大衆の気持はもっぱら宗教でやしなわれていたから、大きなあらしをまきおこすためには、大衆自身の利益も宗教的に扮装してもちださなければならなかつたのである。(「ルートヴィヒ・フオイエルバッハとドイツ古典哲学の終結」『マルクス・エンゲルス全集』第二一巻、大月書店、一九七一年、三〇九頁)

と述べる。エンゲルスがここで示すのは、当時のすべての社会運動と政治運動についてである。換言すれば、中世のヨーロッパにおいて、封建階級がその統治を維持するために宗教を利用しなければならなかつたことは当然のこと、被抑圧階級の反抗運動もまた、宗教という形式を借りざるを得なかつたのであり、これは歴史の必然である。宗教がこのような二つの状況において起こした二つの作用の相違は明確であり、混同することはできない。

そのほか、さらに指摘しなければならないのは、宗教の社会的作用は政治の側面のみで考察することはできず、宗教は各民族に浸透しながらその歴史や文化の不可分の一部分となつてきたのであり、あらゆる民族の文学や美術、建築なども、程度の多少はあれ、すべて宗教の影響を受けているということである。宗教という形式の下での文化が起こした社会的な影響はおそらく「阿片」の言葉で一律に概括できるものではない。人々が敦煌石窟という仏教芸術の宝庫に立

ち尽くすとき、中国道教の齋醮音楽に聞きふけるととき、あるいはダ・ヴィンチの「最後の晩餐」を鑑賞するとき、シュールベルトの「アヴェ・マリア」に耳を傾けるととき、その感じ方は複雑かつ多様である。宗教という形式の文化遺産に対し、我々はそれらを分析、継承すべきであり、すべてを「阿片」と見なして否定することはできない。

三、社会主義時期の宗教の作用を「阿片」で説明することは、なおのこと不適切である。

本書の第五章において、我々は宗教と社会主義社会が相互に協調し得ることについて初歩的な考察を行った。協調し得るからには、宗教が起す作用について、すべて「阿片」であるとしたり、あるいは基本的には「阿片」であるとしたり、あるいは本質的には「阿片」であるなどとすることはできない。ここで重要なのは、数千年の搾取制度はすでに覆され、搾取階級は階級としてすでに存在せず、宗教の階級の根源はすでに消失したということである。人々はもはや、階級搾取や抑圧が作り出した苦難から抜け出せないことを理由として宗教の慰めに助けを求めることはない。したがって、前述の階級社会における宗教の「阿片」の作用の二つの意味は、社会主義という条件においてはもはや存在しない。

それでは、社会主義社会には困苦がすでに存在しないからには、宗教には少しの消極的作用も存在しないのであろうか。当然ながらそうではない。すでに分析したように、社会主義社会の中では、階級対抗的な矛盾はすでに解決したけれども、しかし人民内部の多くの矛盾は、いまだに存在しており、さらに多くの社会問題が存在している。例えば、貧困や病気、学校中退や失業、離婚や失恋、家庭不和、官僚主義、不正の弊習などである。これらはすべて、人々に一時的な困苦をもたらし、彼らの一部は宗教に助けを求めるだろうし、その中の一部の人々は宗教によって消極的、厭世的となるであろう。これは伝統宗教の教義が社会主義社会という条件において引き起こす一種の消極的作用である。信教の民衆が多く居住する地域で、かつ経済が困窮し、文化が立ち遅れ、宗教の影響が色濃い場所では、特にこのような状況が顕著である。しかし指摘しなければならないのは、前述したような民衆の一時的な困苦は、搾取制度による苦難とは本質的には異なるということである。前者は民衆自身の努力によって次第に克服し得るものであり、また、社会の関係部門や宗教界の愛国的な人々の協力を加えれば、これらの宗教徒の何らかの消極的な思想もまた次第に変化させることができるものであって、宗教のこのような消極的作用は最小の範囲内に止めることが可能である。

我々は、社会主義という条件における宗教の社会的作用は三つの状況以外にはないと考える。(1) 社会制度の重大な変革と宗教の状況の根本的变化により、愛国主義や社会主義の思想の影響のもとで宗教は社会主義社会と相互に協調す

ることが可能であり、宗教徒自身にもそれが果たすべき社会に有益な作用を起こす。(2) 何らかの伝統的な宗教教義や教規や活動は、新社会において宗教が依存する特定の条件と結合して、依然として宗教徒に対して悪影響を生じさせる。当然、悪人に利用されたり、社会の安定を破壊したり、人民の健康に危害を及ぼす可能性も存在する。(3) 宗教は一部の人の思想信仰である。唯心主義的世界観ではあるが、個人の生活であつて社会に無害である。

社会存在は社会意識を決定するのであり、宗教の社会的作用は固定不変であるはずがない。社会主義物質文明や精神文明の建設の発展にしたがい、我々が宗教問題について正確な方針の政策を執行し、障害を克服して正しい方向に導いていくことができれば、宗教と社会主義社会との協調関係は絶えず発展していくであらう。

「宗教は民衆の阿片である」という論述を検討する中で、あるいは社会主義時期の宗教問題について研究探求する中で、マルクス主義を指導とすることを堅持するという原則のもと、すべて実際の状況を起点として社会主義時期の宗教問題についての学際的総合研究を行うことは、研究仕事を深みへと推進するための重要な道筋であるということを、我々は一層実感した。

哲学の側面から宗教を研究することは必要なことであり、建国以来、我が国の学術界の宗教に対する研究も主に哲学や思想史の側面から行われてきた。数年来、我々は調査研究の実践を通じて、この側面から社会主義時期の宗教問題を研究しても、宗教という社会現象を完全に理解することは不可能であると実感した。なぜならば、哲学の側面のみから宗教を研究すると、しばしば注目されるのは人の思想における有神無神や、唯心唯物といった様々な相違であつて、その他の様々な事柄、例えば心理や文化、道徳、及び組織、経済などの要素は見落としがちである。今日の社会主義建設の全体的局面から見れば、このような要素は重視しないわけにはいかない。本書の緒論において、宗教は一種の実体でもあると述べた。我々が考えるに、社会実体としての宗教は、一種の意識形態であるだけでなく、一種の文化の形式であり、一つの社会コミュニケーションであり、何らかの経済的実力を備えた一つの社会団体である。それ自体に複雑な階層を内包する宗教に対しては、当然多くの学問分野からの総合的な研究が行われるべきであり、そうしてこそ、人々の認識を宗教の実際に合わせていくことができる。

この数年、我々は調査研究において、宗教哲学に触れてきたほか、実質的にはすでに社会学や心理学、倫理学、民族学、民俗学等の分野の内容に触れてきた。たとえば、現代の民衆の信教の原因を調査研究する中で、我々は、宗教は旧来の

意識形態の残余に過ぎず、社会主義社会では存在の基礎をすでに喪失しているといった見解は、明らかに実際の状況とは符合しないということを実感した。我々は、歴史や社会、心理といった側面から宗教が社会主義時期に長期的に存在する根拠を検討してきた。また、我々は調査から得られた多くの素材に基づき、宗教は我々の社会主義社会と相互に協調できることを論証した。

我々が説くこのような協調とは、決して有神無神や、唯心唯物といった二つの異なる思想体系が調和、あるいは代替可能かなどということを目指すのではなく、政治生活や社会生活の中での協調を指すのであり、愛国主義や社会主義の基礎の上での協調を指す。当然、宗教信仰者にとつてみれば、このような協調は宗教に由来する彼らの思想や信仰、道德及び行為と不可分である。あるいは、ここで説かれる協調とは哲学的世界観からではなく、社会的側面から提起されたものであるということもできる。

それでは、我々是有神、無神の相違や矛盾を見ることはなかったか。否である。しかしながら我々が気付いたのは、中国の歴史において政治と宗教とは一貫して分離していたのであり、宗教は過去において中国の民主革命の重大な障害となつたことはなく、政教の一致する一部の少数民族の地域であっても一般的には同様だったことである。社会主義建設の現段階において、信教の民衆と不信教の民衆とは事実上すでに四化建設の大道を、手を携えてともに歩んでおり、宗教信仰における相違は事実上、二次的なものであつて、ことさらにそれを最重要課題として位置付けるべきではない。

マルクスは「一八四四年の経済学・哲学手稿」において次のように述べている。

もしもただ宗教哲学等々のみが私にとつて宗教の真のあり方であるならば、私はまたただ宗教哲学者としてののみほんとうに宗教的なのであり、だから私は現実的、宗教性と現実的に宗教的な人間を否認するわけである。『マルクス・エンゲルス全集』第四〇巻、大月書店、一九七五年、五〇五頁、傍点は訳文に依る。』

我々は、この文章はすばらしく的を射ていると考える。この中でマルクスが説く「宗教の真のあり方」とは、紛れもなく「現実的な宗教性と現実的に宗教的な人間」を指す。

今日の中国において、宗教を信仰する人の中でどれだけの人が宗教哲学者を称し得るだろうか。また、どれだけの人が本当の意味で宗教哲学を理解しているだろうか。もし我々がただ宗教哲学という側面のみから宗教を認識し、宗教問題を研究するのであれば、現実の中国の宗教から乖離しないことがあろうか。

外国の一人の学者は、宗教とは五つの要素を含むある種の現象であると述べる。すなわち、教会、儀礼、信仰や観念、特殊な情感的経験、そして道徳規範である。この定義は宗教が単なる意識形態に過ぎないものではないことを説明している。しかし、この説にも大きな欠陥があり、宗教の中で最も活発で重要な要素を見逃している。それはすなわち宗教信仰者であり、またマルクスの説く「現実的に宗教的な人間」である。我々が実践の中で深く理解したのは、社会主義の条件下での「現実的に宗教的な人間」の思想、信仰、道徳や行為、及び彼らより組織される宗教集団について研究を行うのであれば、必ずや多くの学問分野に跨って行わなければならない、学際的な総合的研究のみ、科学的に全面的に社会主義時期の宗教の面貌を提示し、その変化の法則を探索し、国家が制定する正確な政策のための理論的根拠を提供することができるということであつた。

次に、宗教学の理論構築から見れば、学際的な総合研究を行うことは、歴史の必然である。現在の国際学術界では、自然科学や社会科学の新学科や辺縁学科、及び社会科学と自然科学の相互浸透的な総合学科は、雨後の筍のように、目もくらむほどに続出しており、一つ一つ確認する暇もないほどである。宗教学研究の状況もまさにこのような状況である。例えば、宗教学や宗教心理学、宗教倫理学、宗教民族学、宗教人類学など、多くの分野が設立され、諸説紛々としており、これらにより宗教についての研究は大いに拡大し、かつ深化してきた。このような状況は欧米各国に限ったことではなく、ソ連や東欧の一部の国家の宗教学者もまた歴史的経験や教訓を総括し、このような学際的学科の研究に注意を払っている。

我が国はこの方面を開始するのに後れを取つたと言わなければならない。したがって、我々は「七五」計画の期間において宗教について多学科的な総合研究を行い、マルクス主義と中国の実際が結合した、中国的特色を有する宗教学を構築するために探求を行わなければならないと考えている。

後記

「中国社会主義時期的宗教問題」とは、上海社会科学院宗教研究所が担当した「六五」計画期間^②全国哲学社会科学重点科研项目の一つであり、本書はこの項目の研究成果である。

マルクス主義を学習、運用し、理論を実際に関連付け、実際から出発し、実事求是すること、これは我々がこの研究を進めるうえでの基本的な方法である。三年来、我々は全国の若干の都市や農村において比較的広範な調査研究を行ってきたが、その中で、各地の党政機関（特に統一戦線、宗教工作部門）の指導と支持が得られ、各愛国宗教組織の関心と協力が得られた。本書の初稿が完成したのち、比較的広範に宗教理論研究や実際の工作部門に意見を求め、学者や幹部及び宗教界の友人からのご教示をいただいた。上海市宗教学会は我々と共同でこの研究を行った。謹んで援助を提供してくださった各単位及び同志たちに感謝を表したい。

本書の編著あるいは調査研究に参加した人員は以下の通りである。（姓名〔簡体字〕筆画順）方興、業露華、劉建（特約）、阮仁沢、張綏、沈以藩、蕭志恬、陳耀庭、羅偉虹、姚民権、高振農、顧裕禄、曹聖潔、常霞青、瞿明明。本書は章ごとに編纂された後、蕭志恬と陳耀庭により通稿された。宗教研究所のその他の同志も原稿の討議や補助作業に参加した。

本書の附録の調査報告は、何炳済と鄭凱堂同志が書いた二篇のほかは、すべて宗教研究所の同志の撰述したものである。社会主義時期の宗教問題とは一つの新しい課題であり、本書は初歩的な検討に過ぎず、浅薄な記述や誤謬は免れ得ないものである。この課題の研究を推進するため、広大な読者のご批判やご叱正をいただくことを願っている。

注

- (1) 訳者注…「七五計画」とは中華人民共和国の経済長期計画である「第七箇五年計画」のこと。一九八六—九〇年の五年計画で、一九八六年に全国人民代表会第六期第四次会議にて採択された。
- (2) 訳者注…「六五計画」とは、前注「七五計画」と同様に、中華人民共和国の経済長期計画であり、「第六箇五年計画」のこと。一九八一—八五年の五年計画で、一九八二年に全国人民代表会第五期第五次会議にて正式採択された。

（キーワード） 社会主義中国、宗教信仰の自由政策、羅竹風、宗教阿片論、マルクス主義